

花川病院

症 例 概 要 患者氏名：H・S様 （70代 女性）

病名：外科的術後廃用症候群、2型糖尿病、関節リウマチ

入院期間：①平成30年8月上旬 ～ 平成30年11月下旬

②平成30年11月下旬 ～ 平成31年1月下旬

経過：階段から転落し腰椎圧迫骨折となり急性期病院で手術。その入院中に肺膿瘍、腸腰筋腫瘍、急性胆のう炎、肝被膜下膿瘍を発症、開腹胆嚢摘出術施行したが十二指腸狭窄で、腸瘻管理となった。急性期病院6ヶ月入院で重度の廃用症候群となり腸瘻ですべて全介助状態で転院してきたが、5ヶ月後、経口摂取、独歩で自宅退院となった。

内 容

夫、長女、甥と同居し、専業主婦として生活していた。平成30年2月上旬自宅階段で転落し腰椎圧迫骨折でH病院入院、骨セメント術施行したが誤嚥性肺炎、尿路感染を繰り返し、痰からはセラチア菌検出もあった。その後、肺膿瘍、腸腰筋腫瘍の治療中に急性胆のう炎、肝被膜下膿瘍を発症、5月下旬開腹胆嚢摘出術施行、5月下旬から食事を開始したが嘔吐持続、繰り返す胆のう炎による強い炎症で十二指腸狭窄となり、腸瘻管理となった。

急性期病院に6ヶ月入院中に重度の廃用症候群となり、8月上旬、当院地域包括ケア病床入院となった。

入院時、頸部を持ち上げることも難しく、尖足、関節拘縮と関節痛、ADLすべて全介助、認知機能の低下もあった。

目標を「耐久性の向上」「トイレ動作獲得」「介助量軽減」「経口摂取」として取り組んだ。

入院1ヶ月で車椅子離床1時間程度、2ヶ月目でトイレ誘導開始、3ヶ月目で車椅子から歩行車歩行となった。10月から嚥下に問題ないことから前医から許可があった少量のカステラ、お饅頭、水分など摂取となったが嘔吐はなかった。

家族は腸瘻の対応可能な老健を見学したが、腸瘻から脱することを希望し再度、11月下旬の期間にH病院へ転院した。その結果通過障害なく腸瘻不要となり抜去、経口摂取可能となった。

その後は自宅退院をめざし意欲的にリハビリに取り組み、歩行は独歩、ADLはすべて自立となり平成31年1月下旬、自宅退院となった。

急性期病院に6ヶ月入院し転院時には腸瘻と重度の廃用症候群で、本人、家族も改善をあきらめ施設見学をしていた。経口摂取、独歩で自宅退院までの改善は予想しなかった。今回は主治医からミラクル賞の推薦があった。

FIM	入院時	運動13点/91点	認知24点/35点	計	34点/126点
	退院時	運動66点/91点	認知34点/35点	計	100点/126点